

# 万吉だより

MA

GECHI

NEWS

第34号 令和4(2022)年3月

## 三宅敏之先生の考古学

館長 時枝 務

立正大学の考古学は、卒業生だけによって築かれたのではなく、他大学出身者でも大きな功績を残された方がおられることを忘れてはならない。そのおひとりが三宅敏之先生である。

三宅先生は大正12年(1923)8月18日に京都市で出生した。北野天満宮に近い上千軒の一画にあった伝統的な町屋でのことと仄聞する。その後、旧制中学までは京都で過ごしたが、東京高等師範学校に入学されて、活躍の舞台は東京に移る。昭和19年(1944)に東京文理科大学文学部国史学科に入学されたが、すぐに徴兵され、津田沼陸軍予備士官学校・前橋陸軍予備士官学校へ配属されるが、終戦と同時に東京文理科大学に復学となった。在学中の昭和22年6月に国立博物館陳列課員(考古)に採用され、9月に東京文理科大学を卒業した。卒業論文は寢殿造式伽藍配置に関するものであったと仄聞する。東京文理科大学では、木代修一教授に師事し、家永三郎氏と懇意な関係にあった。浄土教への関心がやがて経塚研究に結実するのである。昭和25年には、新設されたばかりの文化財保護委員会に転じ、以後長年文化財保護行政に携わるようになった。昭和42年に漸く東京国立博物館に戻り、以後要職を歴任し、次長で退任された。この間、長年にわたって立正大学に出講され、何人かの研究者を育てた。平成17年(2005)6月5日に永眠された。

三宅先生の学問的な成果は『経塚論攷』(雄山閣出版、1983年)に凝縮されているが、関心のある方は直接本をご覧いただくこととして、ここではその内容の紹介ではなく、生前にお伺いしたことを含めて、三宅先生の考古学の特色について述べておくことにしよう。

先生の考古学の特色は、第一に、文献史料を積極的に活用され、考察を深化されたことである。たとえば、『玉葉』を活用し、皇嘉門院聖子の葬送と経塚造営の実態を解明した上で、地理的に無関係とは思えない稲荷山経塚に注目し、それが同一の経塚であることを説くなど、推理小説を超える考証の鋭さをみせる。稲荷山経塚出土品に、紅皿などが含まれている理由が、おのずからあきらかになることはない。

第二に、先生が常々おっしゃっていたことではあるが、現場を自分の足で確認する作業を実践することである。それがいかに困難なことであっても、確認した上でないと立論しない慎重さが、基本的なスタンスであった。奈良県吉野の山上ヶ岳に、背広姿で登拝されたという伝説があるが、どうやら真実らしい。橿原考古学研究所の発掘で、山上ヶ岳に金峯山経塚があったことが判明する以前の段階で、そのことを実証したのはまさに慧眼としかいいようがない。

第三に、遺跡同様に遺物も自分の目で観察し、自分で実測し、写真を撮って、記録化したことである。

文字通り実証的な考古学の王道を行った三宅先生であった。

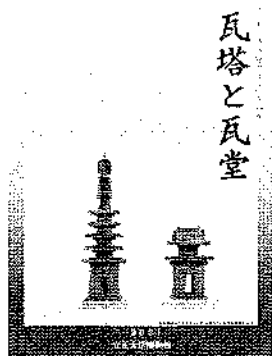
### 事業報告

## 第15回企画展「瓦塔と瓦堂」

2年ぶりの開催となりました企画展では、瓦塔と瓦堂をとりあげました。当館所蔵の新沼窯跡、虫草山窯跡（鳩山町）出土の瓦塔、細田遺跡（桐生市）出土の瓦堂のほか、熊谷市教育委員会、鳩山町教育委員会のご協力により開催することができました。深く感謝申し上げます。

熊谷市教育委員会からは、古代幡羅郡の郡寺と推定される西別府庵寺から出土した大型の瓦塔片と男衾郡の大領である壬生吉志氏に関わる寺院跡と考えられる寺内庵寺出土の瓦塔のほか瓦、土器、塑像なども展示しました。

鳩山町には南比企古代窯跡群があり、瓦塔も生産



展示図録

### ◆記念講演会

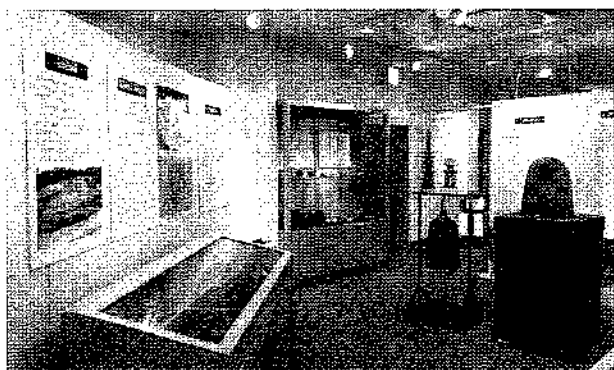
日 時：令和3年12月11日（土） 13：30～  
 会 場：熊谷キャンパス ゲートプラザ1101教室  
 内 容：池上 悟先生（立正大学名誉教授）  
       「立正の考古学」  
       井上尚明先生（立正大学非常勤講師）  
       「古代社会の神と仏」  
 参加者：35名

されていきました。今回は柳原A遺跡で確認された瓦塔焼成遺構出土資料を展示しました。

会期中は、熊谷市内をはじめとする近隣市町村、チラシやポスターをご覧になって遠くからわざわざお越し下さった方々もいらっしゃいました。

企画展開催を記念して講演会を開催しました。

池上先生は、立正大学文学部の教員として39年にわたって学生の指導、調査・研究にあたられ、当館二代目館長として17年にわたって博物館活動を牽引されました。令和3年3月に定年退職され現在は名誉教授として後身の指導、研究にあられています。講演では、「立正の考古学」と題し、立正大学における考古学の調査・研究の歴史を特に今回の企画展



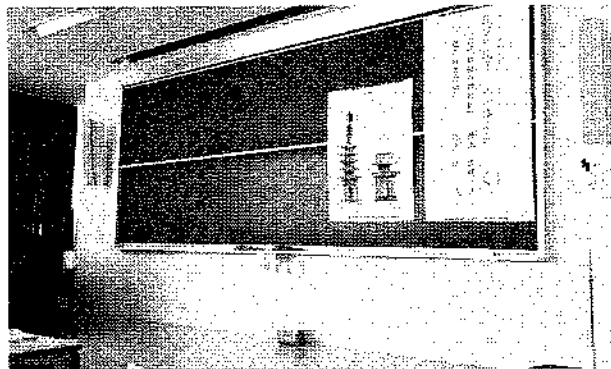
展示室のようす



館長あいさつ



見学者のようす



講演会会場のようす

に沿って、瓦塔が出土した遺跡や窯跡を紹介しながらお話しいただきました。

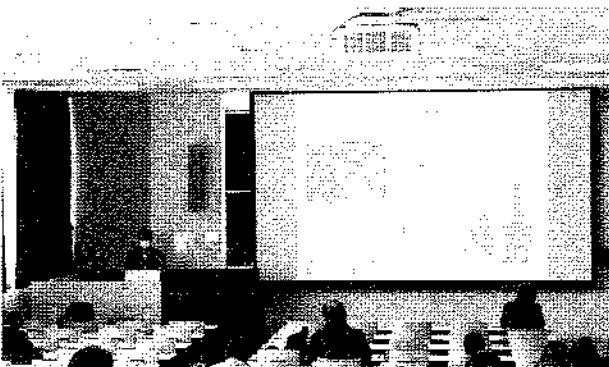
井上先生は、埼玉県教育委員会の学芸員として県内の発掘調査、県立博物館での学芸業務に携わってこられました。現在は立正大学、国士舘大学等で非常勤講師として学生を指導するほか、自治体の文化財審議委員、遺跡の調査指導委員を務め、文化財保護に関わっていらっしゃいます。奈良・平安時代の考古学を専門され、古代における仏教のあり方、神を祀る祭祀の様相についてわかりやすくお話しいただきました。

参加者は、熊谷市内を中心に埼玉県内から21名の方がお見えになったほか、群馬県、栃木県、東京都、神奈川県からもお越しいただきました。皆さん熱心に講演を聴いていらっしゃいました。他の博物館等でポスターやチラシをご覧になってこられたという方が多く、広報の効果がありました。

会場準備や受付等では、OBの高橋杜人さん、高橋一生さん、大学院生の松田俊太さん、齋藤春太郎さん、梶ヶ山廉さんにお手伝いいただきました。記して感謝申し上げます。



池上先生の講演の様子

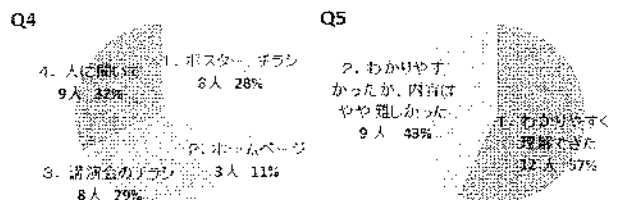
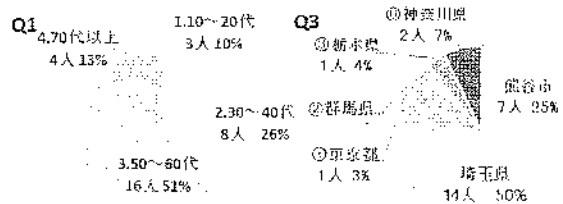


井上先生の講演の様子

### 記念講演会 アンケート結果

以下の質問に当てはまる数字に○をつけてください。

- Q1 あなた様の年齢をお伺いします。
- 1. 10～20代 3人
  - 2. 30～40代 8人
  - 3. 50～60代 15人
  - 4. 70代以上 4人
- Q2 上の質問で、1に○をつけた方にお伺いします。学生ですか？
- 1. 本学学生 3人
  - 2. 他大学学生 ( )
  - 3. その他
- Q3 どちらからお越しになりましたか？
- 1. 埼玉県内 深谷2人 行田3人 入間2人
  - ① 熊谷市 7人 東松山 沼川 神川 加須 秩父
  - ② その他の市町村 14人
  - 2. 埼玉県外
  - ① 東京都 1人 ⑤ 千葉県 0人
  - ② 群馬県 3人 ⑥ 神奈川県 2人
  - ③ 栃木県 1人 ⑦ その他
  - ④ 茨城県 0人
- Q4 この講演会は何で知りましたか？（複数回答あり）
- 1. 企画展のポスター、チラシ 8人
  - 2. 博物館のホームページ 3人
  - 3. 講演会のチラシ（緑の紙） 8人
  - 4. 人に聞いて 9人
- Q5 講演会はわかりやすかったですか？
- 1. わかりやすく、理解できた 12人
  - 2. わかりやすかったが、内容はやや難しかった 9人
  - 3. わかりにくく、内容が理解できなかった 0人
  - 4. 内容が難しすぎた 0人
  - 5. その他 0人



### Q6 講演会・企画展についてのご意見、ご感想をご記入ください。

- 神社のイメージが新しくなりました。たしかに、社がなくても信仰の対象で家に神棚があり、カマドの神がいるといわれていました。
- 駐車場から案内板で会場まで迷うことなく来ることができました。
- 春からの対面を期待しています。オンラインは参加しました。
- たくさん瓦塔をみられてよかった。立正の考古学がマニアックだった。
- 大変勉強になりました。ありがとうございました。
- 立正大学の調査の実績がわかり、良い内容だったと思います。
- 寺と神社の考古学的な話が聞けて良かったです。
- 池上先生のお話を直接拝聴できて良かったです。
- 瓦塔と瓦堂をまとめて展示されていたので大変興味深く見ることができよかったです。
- 講演会もわかりやすい内容で大変参考になりました。(コロナ対策等いろいろ大変な状況の中、無事開催できてよかったですね。)
- 企画展の出展一覧があればよいのではないかと。(出品数に限らず)
- 神と仏との関係について、考古資料をもとにわかりやすく、理解できた。
- 失礼ながら立正大学に博物館があることを群馬県内の博物館でチラシを見つけ初めて知りました。今後はホームページで情報を得たいと思いますが、もっと早く博物館を知りたかったと思います。
- 社会科教諭であるが、非常に勉強になりました。授業や生徒に還元したいと思います。本日は有難うございました。
- 勉強になりました。ありがとうございました。
- 熊谷市民として今まで知らなかったことが多いのですが、少しでも、熊谷の歴史や文化を学ぶ機会を得ることができて感謝しています。なかなか奥が深いですね。今後も楽しみにしています。

## 資料の寄贈

令和3年4月から2月までの間に下記の資料をご寄贈いただきました。

石鏃 1点 縄文時代 長さ2.1cm

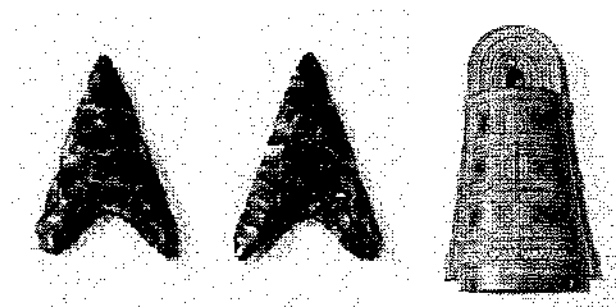
浜松市北区細江町聖隷三方原病院北西出土

前原銅鐸模型 1点 実物の4分の1 鋳物製

説明書(浜松市博物館)あり

寄贈者：藤谷定義氏

(静岡県浜松市・立正大学卒業生)



石 鏃 (表裏)

銅鐸模型

## 収蔵資料の保存修復

令和3年度下記の資料の保存修復を行いました。  
深鉢 縄文時代後期・称名寺Ⅰ式 称名寺A貝塚出土(吉田コレクション)

称名寺貝塚は、横浜市金沢区の称名寺境内及びその周辺に分布する貝塚です。昭和26年から数回にわたって吉田格氏が中心となり日本考古学協会縄文部会、武蔵野文化協会、東京都公園協会と共催し発掘調査を行いました。



称名寺Ⅰ式 深鉢

吉田氏は称名寺貝塚出土の土器を「称名寺式」に設定し、縄文土器編年の標識遺跡となりました。本資料は、太い沈線で弧線やS字縄文を描き、磨り消し縄文を施す典型的な称名寺Ⅰ式土器として有名です。

## 実習生の感想レポート その2



### 学芸員の仕事を体験して

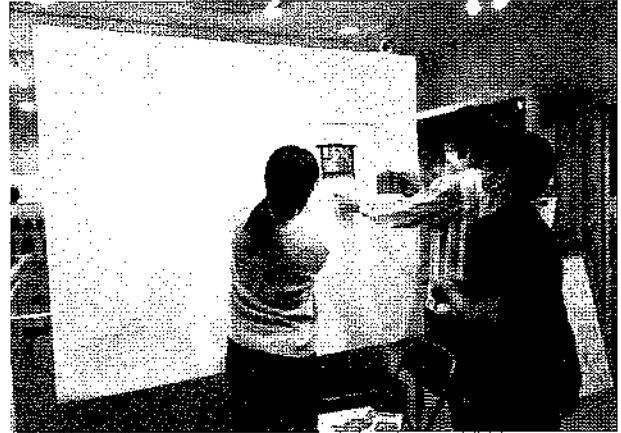
文学部 川田資之

約1週間の実習ありがとうございました。今回の実習を通して自分が実際に資料を取り扱う中で調書の作成から展示を行う工程を実践しましたが、人手が欲しいということが一番実感した。

今回の展示は実習期間が一週間ほどという事もあって扱う資料は少なかったが、資料調書だけでなく梱包に使う緩衝材もいくつも作成しなければならず、人手が足りず学芸員の負担が大きいという印象が強かった。

また、実習では3人ずつの2班に別れて展示作成を行った。そのため、自分だけでは考えつかなかった構成や着眼点、1人では手が回しづらい所も作業を分担し、違った意見を出してくれる人がいることで作業の効率化と他方面への配慮することができた。人が多いとアイデアもその分増えるため展示構成の幅が広がると思われることが多々あった。講義等で資料は慎重に扱うと何度聞いていても、実際に手に取って扱うと思っていたより単純ではなく、資料ごとにどこを持って注意するのか意識する必要があり緊張感があった。時枝館長が講義で言っていたように資料に愛着を持つようになれば扱う際にも慎重になるという言もあって、学芸員を続けていけば慣れるものなのかと思う。

講義や体験談を聞いただけでは実感できない資料を扱う際の感覚や注意点、仕事量の多さの一端を実感できて学芸員の仕事の大変さや創意工夫を学べた。



### 博物館館務実習で学んだこと

文学部 稲垣穂南

本課程を経て、博物館は大勢の人々の協力によって成り立っていることを改めて実感した。展示物に関する専門知識だけでなく、他の館とのコミュニケーションスキルや、柔軟な対応力が求められる仕事であることが分かった。また、キャプションにおいても、さまざまな情報の中から、必要な情報を抜粋し推敲することの難しさを感じた。

より多くの人により分かりやすく理解してもらえよう、誰にでも分かるような展示を目指すことが大切であると学んだ。

### 6日間の経験を活かして

文学部史学科 笠原一希

6日間を通して、特に印象に残っているのが絵馬の企画展示への準備作業です。絵馬自体の説明や歴史を200文字程度で分かりやすく収める事や、実際に展示する際に光の照射角度や飾る形を絵馬の五角形の形に飾るなど工夫したにも関わらず、色彩や年齢層といった着目しきれない場面もあり、苦労しました。

同時に視野をもう少し広げる事で学芸員となった際は勿論のこと、卒業論文や就職後の企業でも生かしていけると勉強にもなりました。改めて6日間本当にありがとうございました。

\*実習生3名のレポートを掲載しました。他の3名のレポートは33号に掲載しました。

## 資料紹介

### 城ノ台北貝塚出土の石器

上野真由美\*

はじめに

筆者は、吉田格コレクション（註1）の城ノ台北貝塚・子母口貝塚考古資料の整理に関わり、報告を行った（金子・上野ほか2021）。その中で、出土した石器の図化を行ったが、報告後に未報告の石器があることがわかった。

石器には、吉田格氏が石器時代第1号に発表した石器が含まれていた。そこで、未報告の石器3点について、万吉だよりに資料紹介をすることとした。

#### 1 城ノ台北貝塚の立地と環境

城ノ台北貝塚は千葉県香取市虫幡横畑1495番地周辺の貝塚で、香取市木内城ノ台地38番地周辺の城ノ台南貝塚とともに城ノ台貝塚を構成している。

城ノ台北貝塚は成田線小見川駅の北西約2.5km地点の、南に突出する標高約40m前後の舌状台地斜面に形成されている（第1図）。

貝塚は、利根川の河口から約25km遡った右岸の下総台地縁辺部にあたり、利根川へと注ぐ黒部川で解析された沖積地に面する舌状台地上に立地している。この台地裾部には南北両側から湾状の谷が入り、谷に挟まれた台地鞍部の南北湾奥部斜面に貝塚が形成されている。北貝塚はその北斜面に形成された貝塚である。

貝塚周辺は複雑な樹枝状谷が発達しているが、黒部川で解析された円形の湾状沖積地を取り巻く台地上には、中期の木内明神貝塚、阿玉台貝塚、白井大宮台貝塚など古くから注目され調査された著名な貝塚が存在している。（金子・上野ほか2021、p5-6抜粋転載）

#### 2 城ノ台北貝塚の調査

吉田氏による城ノ台北貝塚の調査は、試掘のあと、本調査が2回行われている。

試掘調査は、1948年3月と、1949年4月に行われている。

1回目の発掘調査は1949年の11月に5日間行われている。

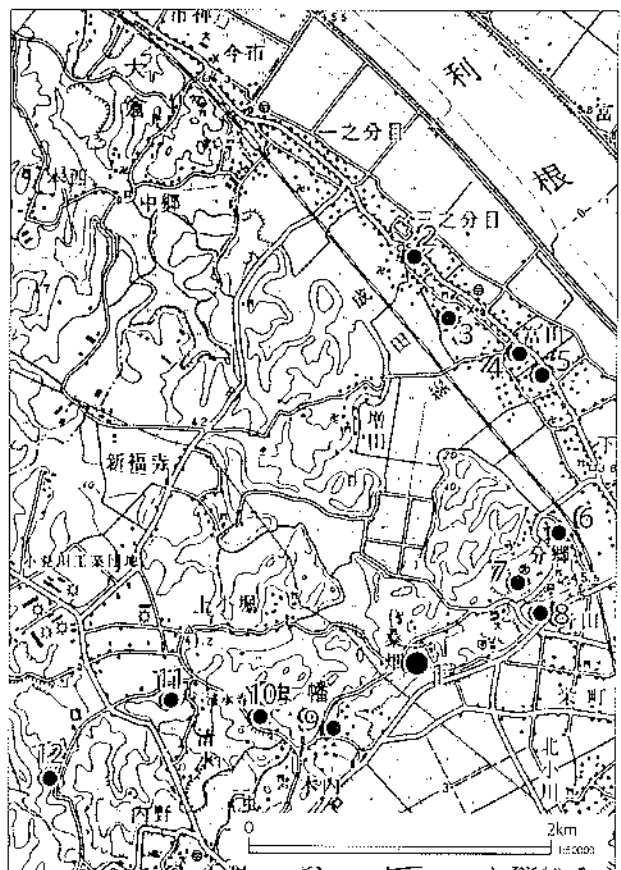
2回目の発掘調査は、1950年10月に4日間行われた。調査の結果、3層の貝層を検出し、それに伴う遺物として、田戸下層式、田戸上層式、子母口式土器が層位的に検出されている。

吉田コレクションとして寄贈された城ノ台北貝塚の遺物は、それらの調査成果である。

#### 3 出土石器

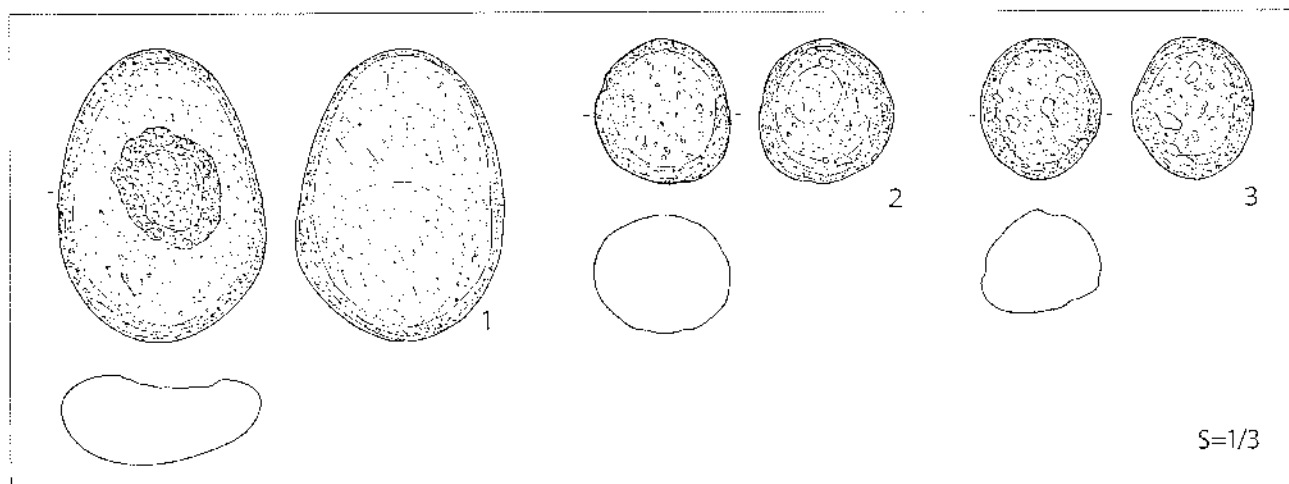
今回、資料紹介をする石器は、第2図1～3である。

1は、石器時代第1号に掲載された敲石である（第3図2）。子母口式土器の層から発見されたものとされている（吉田1955）。器面全体的に、コーティングされているようなテカリがある。表面中央に、凹部が一箇所認められる。凹部は、敲打により窪みをつけたものと考えられ、石皿に見られるような漏斗状の凹部とは明らかに違っている。凹部以外



1. 城ノ台貝塚 2. 三之分目大塚山古墳 3. 富田1号墳
4. 富田2号墳 5. 富田3号墳 6. 小見川城址
7. 城山1号墳 8. 城山4号墳 9. 木内廃寺
10. 木内明神貝塚 11. 清水堆遺跡 12. 内野貝塚

第1図 城ノ台貝塚位置図  
（平野1988より転載一部改変）



第2図 出土石器

の表裏面は、磨石として使用されていたと考えられる。周縁も磨っていたと考えられるが、表裏面ほどは使用されていない。また周縁部を観察したが、明確な敲打の痕跡を認めることはできなかった。

石器の長さ9.7cm、幅6.9cm、厚さ3.0cmで、重さ261.1グラムである。石材は砂岩である。破損はなく、完形である。

2、3は軽石製の石器である。2点とも、緑色で、「シロ」と注記されている。

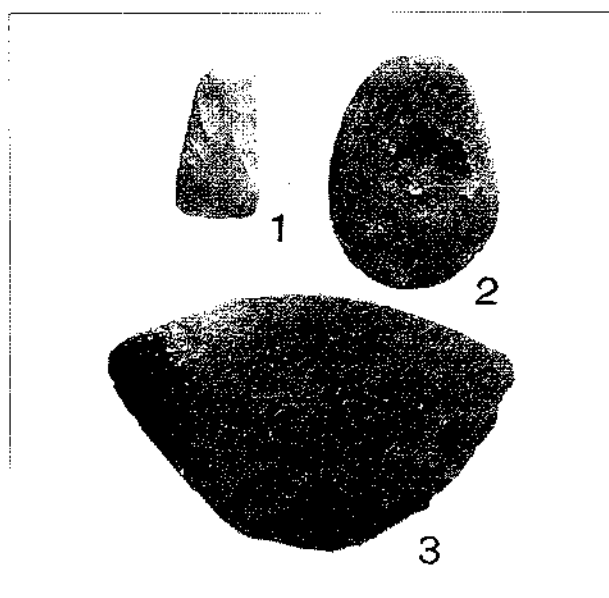
この「シロ」注記の出土位置は、出土した土器との関係性から表土を含めた層位不明を表していると考えられている（金子・上野ほか2021 p8参照）。

そのことから2、3は、表土から検出されたと考えられる。

2、3はほぼ球形に加工されている。軽石は柔らかく加工しやすい石材である。使用方法は不明だが、使用によって一定の大きさになった軽石を、廃棄したとも考えられる。

2は、長さ4.8cm、幅4.5cm、厚さ4.0cm、重さ22.9gである。破損はなく完形である。

3は、長さ4.6cm、幅4.0cm、厚さ3.4cm、重さ17.7gである。破損はなく完形である。

第3図 城ノ台貝塚出土石器  
(吉田格1955より転載)

註1 吉田格コレクションは、吉田氏が長年にわたって調査・研究し、収集した膨大な資料を1989年、出身校である立正大学学園に寄贈された資料である。その後、2002年の立正大学博物館開館に伴い、博物館に移管され、収蔵・展示されている。

\*埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 引用・参考文献

吉田格 1955『千葉県城ノ台貝塚』『石器時代』第1号

平野功ほか 1988『千葉県香取郡小見川町内遺跡群発掘調査報告—城ノ台北貝塚—』

小見川町文化財報告第13集

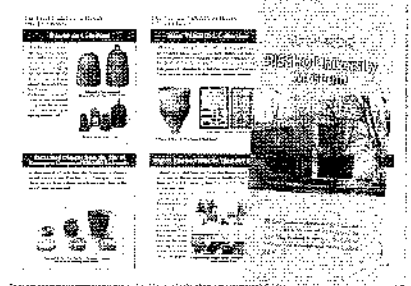
金子直行・上野真由美・足立佳代・時枝務 2021『吉田格コレクション 城ノ台北貝塚・子母口貝塚考古資料』館蔵資料「基礎文献」叢刊 第九輯 立正大学博物館

**参観者の声**

- 大宮の博物館でポスターを見て来ました。立正大学に博物館があると知って、初めて来ました。(男性・60代)
- 地理学科のOBです。同窓会の新聞などに博物館の情報も掲載してほしい。(男性・70代)
- 板橋から来ました。静かで、ゆっくり見られてよかったです。東上線を使って来られたので、また参観したいです。(女性・60代)

**刊行物**

令和3年10月から3月までに下記の刊行物を発行しました。英文のパンフレットは文学部社会学科准教授の瀧口美佳先生に翻訳していただきました。



- パンフレット日本語版 英語版
- 第15回企画展「瓦塔と瓦堂」展示図録

**利用案内**

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金・土・曜H (大学休業中を除く)

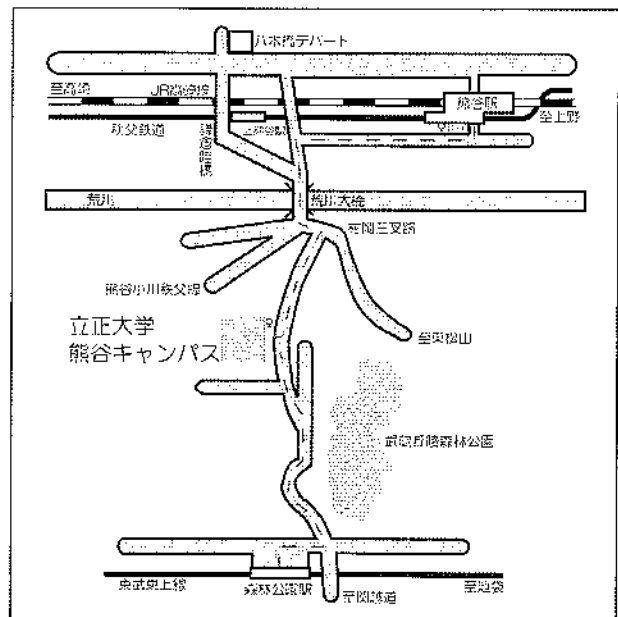
開館時間：10:00～16:00

※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧ください。

交通機関：

- ①JR高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車  
南口より立正大学行バス(国際十王交通)で約10分。
- ②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際十王交通)で約12分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課  
(048-536-6010)にご連絡下さい。



**あとかき**

12月から企画展を開催することができました。寒い季節ですが、ポスターなどを見て参観者の方がおみえになりました。記念講演会には、地域の方々、研究者、OBなどが参加されました。

3か年にわたって学芸員を務めました。疫病蔓延で大変な2年間となり、2月末にはロシアがウクライナに侵攻し、戦争状態となっています。混沌とした状況ですが、お世話になった方々、来館者のみなさまには感謝申し上げますとともに、一日も早く平和な世界となることを祈っています。(足立)

立正大学博物館館報 万吉だより 第34号

令和4(2022)年3月3日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

E-mail : museum@ris.ac.jp

URL : <https://www.ris.ac.jp/museum/profile/index.html>

(印刷：アサヒコミュニケーションズ)

題字揮毫 田淵鏡斎 (立正大学名誉教授)